

編曲の妙技 — 生まれ変わる名曲たち

プログラム

今回のテーマは編曲です。編曲とは楽曲の本来の形から、他の演奏形態に適するように改編することです。旋律だけの原型に伴奏を付加したり、まったく異なった楽器編成に改めたり、小規模な編成の楽曲を大編成に書き改めたりする場合など様々ですが、今日は編曲によって名曲がいかにか生まれ変わるのか、その妙技をたっぷりと味わっていただければと思います。

ドビュッシーの小組曲はピアノ連弾の形で作曲されましたが、後に友人のアンリ・ビュッセルが管弦楽用に編曲、広く知られるようになりました。バーバーの弦楽のためのアダージョは、弦楽四重奏曲のアダージョ楽章を弦楽オーケストラ用に自身で編曲、さまざまな場所や映画、ドラマの場面で使われ、名曲として定着しました。後にバーバーは「アニュス・デイ」という混声合唱曲にも編曲、今日はマナーズが弦楽オーケストラを伴奏にした編曲版でお聴きください。ブラームスのピアノ四重奏曲第1番は、彼の室内楽の中ではそれほど人気のある作品ではありませんでしたが、これに不満を持ったシェーンベルクが、優れた作品である事を世に知らしめるために編曲を試みたと言われています。バッハのシャコンヌは無伴奏ヴァイオリンのための曲ですが、長大なシャコンヌは単独でもしばしば取り上げられる名曲です。多くの作曲家、演奏家による編曲があり、ブラームスによる左手の為のピアノ編曲、巨匠アンドレス・セゴヴィアによるギター編曲などが知られていますが、今日は最も演奏頻度の高いブゾーニによるピアノ編曲版です。ムソルグスキーの「展覧会の絵」の原曲はピアノ曲ですが、ラヴェルの編曲によって、全く新しい管弦楽の名曲として生まれ変わりました。一部原曲と比較しながらお楽しみください。(中川)

クロード・ドビュッシー (1862~1918):

アンリ・ビュッセル (1872~1973) 管弦楽編曲版

小組曲 — 1. 小舟にて 2. 行列 3. メヌエット 4. バレエ

マルチエツロ・ヴィオッティ指揮ケルン放送交響楽団
(1992.5.15 カイザー・フリードリヒホールでのLive)

サミュエル・バーバー (1910~1981):

テイヴィット・マナーズ 弦楽オーケストラと合唱付き編曲版

弦楽のためのアダージョ

サカリ・オラモ指揮BBC交響楽団/BBCシンガーズ
(2021.9.11 ロンドン、ロイヤル・アルバートホールでのLive)

ヨハネス・ブラームス (1833~1897):

アルノルト・シェーンベルク (1874~1951) 管弦楽編曲版

ピアノ四重奏曲第1番ト短調 Op.25 ~ 第1楽章から、第3楽章から、第4楽章

クリストフ・エツシエンバッハ指揮フランクフルト放送交響楽団
(1997.11.17 フランクフルト、アルテ・オペアでのLive)

*** 休憩 ***

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685~1750):

フェルッチョ・ブゾーニ (1866~1924) ピアノ編曲版

**シャコンヌ — 無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番二短調 BWV.1004 第5曲 —
エフゲニー・キーシン(ピアノ)**

(1996.8.13 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)

モテスト・ムソルグスキー (1839~1881):

モーリス・ラヴェル (1875~1937) 管弦楽編曲版

組曲“展覧会の絵”

ヴァレリー・ゲルギエフ指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(2000.4.30 ウィーン・ミュージクフェラインザールでのLive)

曲目解説

ドビュッシー：小組曲（アンリ・ビュッセル管弦楽編曲）

フランス近代の作曲家ドビュッシーは、旧来の伝統的な和声を軸にした音楽から脱却し、印象主義と呼ばれる新しい音楽語法を確立し、20世紀音楽の扉を開いた巨匠として知られています。ピアノ作品も数多く残っていますが、**小組曲**は1886年から1889年にかけてピアノ4手連弾のための作品として作曲され、一方の奏者をドビュッシー自身が受け持ち初演されました。初演では高い評価は得られませんでしたでしたが、その後1907年頃、ドビュッシーの友人であった**アンリ・ビュッセル**が管弦楽用に編曲し、一躍世に知れ渡るようになりました。ドビュッシーの指示があつたであらう事は想像できますが、繊細で洗練された見事な編曲は、この名曲を新たに蘇らせたと言って良いと思います。

1. 小舟にて 2. 行列 3. メヌエット 4. バレエ

バーバー：弦楽のためのアダージョ作品11（デイヴィット・マナーズ編曲）

アメリカ現代の作曲家バーバーは、ヨーロッパの伝統的な書法を巧みに取り入れ、保守的な中にもアメリカ現代を反映する新鮮な響きは、優れた音楽性を示し、アメリカを代表する作曲家のひとりとして知られています。**弦楽のためのアダージョ**は、ローマ留学中の1937年に作曲した弦楽四重奏曲短調のアダージョ楽章を弦楽5部のオーケストラ用に編曲したもので、1938年11月5日にトカスニーニ指揮NBC交響楽団によって初演されました。1963年アメリカのジョン・F・ケネディの葬儀に使用された事でこの曲は一躍有名になり、その後こうした場での定番曲として使われるようになりました。しかし、バーバーはその事に不満を持っていたようで、1967年混声合唱用に、ミサ典礼における聖歌の一つで、ラテン語で神の小羊を意味する「アニヌス・デイ」と題して編曲しました。演奏は無伴奏混声合唱、又は伴奏としてピアノかオルガンとされていますが、今日は**デイヴィット・マナーズ**編曲による弦楽オーケストラ伴奏による演奏。静穏を維持しながら頂点へ膨らみを増して行く曲想は感動的です。

ブラームス：ピアノ四重奏曲第1番ト短調作品25

（アルノルト・シェーンベルク管弦楽編曲）

ブラームスがこの作品に着手したのは1855年以前と考えられていますが、1859年までに一応書き上げられたものの、その後大幅な書き換えがなされ、27歳の1861年9月に完成、同年11月16日にクララ・シューマンがピアノを受け持ち、ハンブルクで初演されました。若々しく力強い響きを持つピアノと弦のバランスが理想的に融合した名曲ですが、演奏頻度は決して多いとはいえませんでした。1937年、20世紀音楽の大家**シェーンベルク**が管弦楽用に編曲、翌1938年5月にクレンペラーの指揮で、アメリカ、ロサンジェルスにて初演されました。その後、この曲の評価は高まり、今日では原曲よりも頻繁に取り上げられるようになりました。シェーンベルクは編曲の理由について「大好きな室内楽の名作にも関わらず、なかなか演奏される機会が少なく、演奏されても良い演奏に巡り会えない。だから自分がアレンジするしかなかったのだ」と述べたと伝えられています。

バッハ：シャコンヌ－無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番ニ短調BWV.1004第5楽章－

（フェルッチョ・ブゾーニ編曲）

18世紀ドイツの大作曲家バッハは、最初ヴァイオリン奏者としてスタートし、その後オルガニストとなり、ワイマールの宮廷オルガニストを経て、1717年からはケーテンの宮廷楽長となりました。ケーテン時代の1720年に無伴奏チェロ組曲、無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータが相次いで完成。特に無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番は終楽章に長大なシャコンヌを持つことで有名で、単独でもしばしば演奏されるため、多くの編曲があります。ブラームスによる左手のピアノ編曲版、巨匠アンドレス・セゴヴィアによるギター編曲版、斉藤秀雄による管弦楽編曲版など様々ですが、今回はイタリアの作曲家**ブゾーニ**によるピアノ編曲版です。ブゾーニは優れたピアニストで作曲家でしたが、バッハの研究にも積極的でした。原曲の構成を忠実に守りながら、ピアノという楽器の効果を最大限に発揮できるよう技巧的に付加しました。最も広く知られた編曲版です。

ムソルグスキー：組曲“展覧会の絵”（モーリス・ラヴェル管弦楽編曲）

リムスキー＝コルサコフやポロディンらとロシア国民楽派の「5人組」として活躍したムソルグスキーは、中でも最も独創的で、表現主義や印象主義を先取りしたような近代的センスを持ち、ドビュッシーにも影響を及ぼしました。幼い時からピアノの手ほどきを受け、優れた才能を持っていましたが、**組曲「展覧会の絵」**は、1874年に完成したピアノ曲で、亡くなった親友の建築家ハルトマンの遺作展覧会から着想を得て作曲されました。曲は10の小品とプロムナード（散歩）と称する短い間奏曲で結ばれています。時を経て1922年、名指揮者クーセヴィツキーの依頼により、オーケストラの魔術師と呼ばれるフランスの大作曲家**ラヴェル**が管弦楽用に編曲、一躍世に知られるようになります。きらきらとした色彩感やラヴェルならではの、原曲では表現出来なかった新たな魅力を生み出しています。プロムナード－小人－プロムナード－古城－プロムナード－テユイルリーの庭－ビドロ（牛車）－プロムナード－殻をつけたひななどの踊り－サミュエル・ゴールドンベルクとシユミイレー－プロムナード－リモージュの市場－カタコンブ－ババ・ヤーガの小屋－キエフの大門